編集後記

今月号では､｢ベーシックインカム｣が取り上げられている。現在の混迷する不安定な時代に､ベーシックインカムの導入の是非の議論は真剣に行われるべきだ。過去から現在にかけて国連や NGO のワークキャンプや難民キャンプにおいて労働の対価として現金給付や食料給付が行われていたが、「ベーシックインカム」は夢物語だった。しかし、2020年コロナ感染が拡大した時点で日本政府が国民全員に10万円の現金給付を開始したことで夢が現実になった｡オランダの歴史家ルトガー・ブレグマンは、『隷属なき道(Utopia for Realist)』(2017)の中で「人間は AI(人工知能)との勝負に勝てない」と断言した。テクノロジーの恩恵を手放したくないなら､残る選択肢は「再分配」を行い、金銭、時間、課税、そしてロボットも再分配すべきと述べ、その具体的方法としてベーシックインカムを挙げ、人間の労働時間の短縮(1日３時間労働)を提案している。我々の仕事は AI に取って代わられてしまうのか、どのような仕事が人間として残るのか、ブレグマンは同書で非常に重要な問題提起をしている

本号は、「ベーシックインカム」について論文一つと書評一つが取り上げられている。

最初の岡野内論文では、米国が20年に及ぶ対テロ・アフガニスタン援助の失敗の責任をどのようにとるのか、そのためにはベーシックインカムが有効であり、国際社会がその財源をどのように導入するかについて論じている。これまでの援助の最大の失敗の原因が、すべての人に届かないものだったことを明確にし、第二次タリバーン政権に対してアフガニスタンでの一人当たり一日2ドルのベーシックインカムの導入を提案していることはその是非や財源の可能性はともかく注目に値する。アフガニスタンに多額の復興援助を行ってきた日本政府もその責任があり、十分に反省し、この岡野内の提案を傾聴すべきだ。

続く南野の書評は、岡野内の著書を取り上げ、その理論と事例から本書のグローバル・ベーシック・インカムの進むべき方向として、匡正的正義の実現と明確に結論づけ、その構想の立脚点とその進むべき道筋を示している点で本書の意義を強調している。

前号に続く松下論文は、その完結編として「重層的ガバナンスとグローバル市民社会の構想」を述べている。グローバル / ローカルを超えたグローバル・ガバナンスのアプローチの必要性を説き、世界社会フォーラムとグローバルな社会運動の構想を述べている。世界社会フォーラムの次なる展開を述べているが、世界社会フォーラムは世界経済フォーラムの対抗軸として生まれた運動であり、現在も毎年開催されている世界経済フォーラムに向けて異議申し立てを行う場としての役割は残っていると考える。

知足投稿論文は、中国環境問題の重層的構造と環境ガバナンスの動向を紹介し、中国政府下の困難な状況の中で新たな環境ガバナンスを展開する３つの環境NGO の事例を分析し、その成果と課題を明らかにしている。本論文は情報統制下の中国の環境NGO の活動を明らかにして、かつ多数の中国語の原文資料を引用しており、貴重な論考となっている。

最後の油井書評は、ジョン・ダワーの『戦争の文化』を取り上げ、「戦争文化」に対する米国民主主義、軍国主義日本、イスラム主義の「戦争文化」に対する批判は、「平和の文化」を希求するダワ―の真骨頂であると指摘している点は強く共感できる。

最後に、今回の本誌の編集作業は、山中達也理事(編集担当)を中心に行ったことを付記する。

(2022年７月31日　編集長　重田康博)

アジア・アフリカ研究
2022 年 第 62 巻 第 3 号（通巻 445 号）
2022 年 7 月 25 日発行 機関購読料：年間 15,000 円
編 集 人 重 田 康 博
発 行 人 中 野 洋 一
発 行 所 特 定 非 営 利 活 動 法 人
アジア・アフリカ研究所
〒170-0005 東京都豊島区南大塚 2-17-10
Tel&Fax: 03（5972）4740
E-mail:aaken@bz01.plala.or.jp
URL:http://www.aaij.or.jp/
印 刷 所 三 和 印 刷 ㈱
長野県長野市川中島町 1822 - 1

本誌上で各論考の著者がその責任において述べた意見は、特定非営利活動法人（NPO 法人）アジア・アフリカ研究所としての見解を表わすものではありません。
The articles in *Quarterly Bulletin of Third World Studies* do not represent the views of The NPO Corporation Afro-Asian Institute of Japan（AAIJ）. Responsibility for opinions expressed in them rests with their authors.